



岡熊嶽研究

影山, 純夫

(Citation)

日本文化論年報, 24:1-19

(Issue Date)

2021-03

(Resource Type)

departmental bulletin paper

(Version)

Version of Record

(JaLCOI)

<https://doi.org/10.24546/81012670>

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/81012670>



岡熊嶽研究

影山純夫

はじめに

大坂は南画家が輩出した地である。池大雅と並んで南画の大成者と考えられる与謝蕪村も大坂近くの摂津毛馬村の出であり、蕪村の次の世代である松村呉春も摂津の池田に居を構えたこともあり、早くから大坂と南画とは関係が深いといえようか。大坂の南画の概要は神山登氏や橋爪節也氏によって述べられているので、書かれた論考①を参照していただきたいが、初期の南画家としては木村兼葭堂や福原五岳、趙陶齋の名を挙げることができる。この内の五岳の弟子が熊嶽②である。五岳の弟子としては他に浜田杏堂、林園苑、鼎春嶽などがおり、五岳は大雅の弟子であるので、その弟子達は大雅の孫弟子ということになる。しかし大坂の南画家としては、岡田米山人とその子岡田半江に注目が集まってきたのであり、五岳にしてもその弟子にしてもあまり光が当てられてこなかった。

平成二七（二〇一五）年に『唐絵もん』と名づけられた展覧会が千葉市美術館と大阪歴史博物館でおこなわれ③、

南画家として捉えるのは問題が残るのかもしれないが墨江武禪や林園苑の多くの作品が紹介され、やっとその個人的な作風も知られることになった。これまでは作品の発掘の努力がおこなわれなかったことにより、結果として大坂の絵師の評価がなされなかったといえるのであり、今後大坂の絵師の作品がどんどん紹介されることで、新たな魅力が明らかになることが期待されるのである。その試みの一つとして、今回は熊嶽の画業を紹介する。

熊嶽の生涯

熊嶽は『浪華人物誌』④に「大坂の人」「天保四年癸巳十二月二十一日歿す年七十二」とあるので、宝暦二二（一七六二）年に大坂で生まれたことになる。これがどんな資料にもとづくのか明らかではないが、他に生年を考えさせる資料が見つからないのでこれをとりあえず採用しておく。幼名はわからない。俗称は勝之助、名は文暉もしくは嬰で、字は世昌もしくは少年である。熊嶽は号で、他に

餘香堂という号もあるとされることがある。また熊岳林資との落款を記す作品がある。

熊嶽の絵の師についてはすでにふれたが、『浪華人物誌』に「初め福原五岳を師とし後其風を變ず」とあることなどから、福原五岳としてよいであろう。田能村竹田も『山中人饒舌』で熊嶽の師を五岳としている。

至^二大雅池翁^一、則踵^二其躡^一者五岳・福元素最著、杏堂・春嶽・熊嶽數子、皆出^二於五嶽之門^一云

浜田杏堂や鼎春嶽とともに池大雅の弟子である福原五岳の弟子であると述べているのである。春嶽や熊嶽の嶽は、五岳の岳が許されたと考えることができる。

さて、資料の上で熊嶽の名が現れる最初は、『木村兼葭堂日記』の天明三(一七八三)年二月六日の項である。「熊嶽画持参」とあるだけであるが、二二歳で兼葭堂に認められる絵師になっていたということであろう。その後兼葭堂への熊嶽の来訪は増えていき、寛政五(一七九三)年の五月には六度も訪れている。絵についての談義もしばしばなされたのであろう。しかし絵について記されるのはこの日だけである。

残念なことに、熊嶽の天明年間に描かれたと明らか

作品はいまだ公にはなっていないようである。寛政二(一七九〇)年に刊行されたと考えられる『浪華郷友録』には名が見えず、寛政年間前半では、まだまだ職業絵師としての評価は低かったのであろう。

筆者が知り得た最も早い時期の作品は、『奉時清玩帖』⑤に収められた二点の作品である。『奉時清玩帖』の諸作品は天明七(一七八七)年頃から寛政八(一七九六)年頃までに集められとされ、この二点の作品も天明年間に描かれた可能性が無くはないが、寛政年間と仮に考えておきたい。

制作年がわかる作品の内でも最も早い時期の作品は大阪歴史博物館所蔵の傲林閨苑唐人物図で、年記から寛政九(一七九七)年に描かれたことがわかる。林閨苑はやはり五岳に学んだ絵師で、その生没年はわからないが、熊嶽にとつては恐らく教えを受ける兄弟弟子であったのであろう。

ほぼ同じ頃の作品と考えられるのが、個人蔵の『化政間諸名家画冊』⑥中の花鳥画で、この画冊中の谷文晁の作品には寛政八(一七九六)年の、浜田杏堂の作品には寛政九(一七九七)年の年記があり、寛政八・九(一七九六・七)年頃の作品と考えることができる。熊嶽の落款も多くの後

の作品に見られるように崩れておらず、この頃の作品とするに問題はない。

四日市個人蔵の『夜字帖』（『書画集帖』の内）⑦中の陶淵明図も寛政一〇（一七九八）年から一一（一七九九）年頃の作品と考えられる。また関西大学蔵の大坂文人合作扇面も寛政一一（一七九九）年以前のほぼ同じ頃の作品であろう。『化政問諸名家画冊』には文晁や兼葭堂、森祖仙などの絵が収められているし、『夜字帖』には兼葭堂や十時梅厓、森周峯などの絵が収められている。大坂文人合作扇面には兼葭堂や五岳、中村芳中などの書や絵が描かれているので、この寛政年間後半期一三〇歳後半には、熊嶽はかなりの評価を受ける絵師として認められていたと考えてよいのであろう。この事と『兼葭堂日記』に熊嶽がしばしば顔を出す事とは何らかの関係があるのかもしれない。寛政一〇（一七九八）年七月には梅厓と熊嶽が同じ日に兼葭堂を訪れていることも、『夜字帖』と何らかの関係があるのではないかと想像させる。

享和年間から取り組み始めたと考えられるのが、『唐土名勝図会』の図制作である。『唐土名勝図会』は享和三（一八〇三）年に開版願いが出され、文化三（一八〇六）

年三月に刊行された。皆川淇園の序が享和四（一八〇四）年に書かれていることから、また浅文貫の文化二（一八〇五）年の跋文に多年の力を費やすと書かれていることから、多くの図の制作は享和年間に行われたと考えざるを得ない。

『唐土名勝図会』の編述は岡田玉山で、図は玉山、熊嶽、大原東野によって描かれている。当初は六編の刊行が計画されていたが、結局初編の刊行だけに終わった。初編だけといっても六冊からなり、描かれた図の数は極めて多い。編述と図を担当した岡田玉山は、月岡雪鼎に学び多くの絵本の挿絵を描いたが、著述も多く文才も豊であった。そのためこの書の編述と図制作を依頼されたのであろう。大原東野は奈良生まれの博物学者でありかつ絵師であった。その師弟関係については不明である。絵本などの挿図をかなり残しており、絵師としての評価も高かった。図の制作担当に熊嶽と東野を加えたのは、玉山であったと考えるほかない。この書の巻頭に「故兼葭堂木世肅先生遺意」とあり、刊行に木村兼葭堂の遺志が働いているようで、そのために寛政年間後半に兼葭堂とかなりの往来があった熊嶽と東野が選ばれたのかもしれない。熊嶽の描いた図は四二図

で、見開き二面に渡る山水図が多い。東野ほどの数ではないが、制作にはかなりの時間を要したであろう。当然手本となる中国画があり、それを模写することが多かったのではあろうが。

文化年間熊嶽への制作の依頼は、次第に増えたと思われる。しかし熊嶽の作品で公になったものは少なく、文化年間に描かれたとわかる作品も多くはない。そのうちでも東京国立博物館蔵の『絵手鑑』は文化二（一八〇五）年頃に描かれたと考えられる貴重な作品と言えよう。『絵手鑑』は三帖からなり、その一帖が大坂の絵師五〇人の作品が集められた「浪華帖」⑧で、熊嶽の絹本彩色の山水図が含まれる。この山水図には制作年を示すものは無いが、他絵師の作品に文化二（一八〇五）年の年記があり、また絹本の大きさも揃っており、ほぼ同じ時期に描かれたと考えたとしても問題は無いであろう。

池大雅に倣った個人蔵の山水図には文化六（一八〇九）年の年記があり、やはり個人蔵の山水図には文化一〇（一八一三）年の年記がある。他に文化年間に描かれたと考えられる作品に、寄合描きによる個人蔵飲中八仙図がある。これは鼎春嶽、戸田黄山、大原東野、宮本君山等との

共作で、熊嶽は李白を描いている。制作年代は享和年間（一八〇一―一八〇四）から文化八（一八一二）年の間と考えられているが⑨、後に述べるように文化年間と考えてよさそうである。

文化年間の制作としては、『狂歌一人十首』の挿絵のよなものもある。これは三日坊雛丸編集の狂歌集で、文化一〇（一八一三）の正月に刊行された。狂歌作者一人につき一点づつ挿絵が添えられており、原在明、森徹山、橘保春、中村芳中、丹羽桃溪など京坂の絵師が担当した。熊嶽は蚯蚓庵鬼丸の「葉のさまの行儀の時はふちはかまみたるるときをらむといふらん」という狂歌に、蘭図を添えた。

熊嶽と蘭については、田能村竹田が『竹田荘師友画録』に次のように記している。

嘗訪_レ其居_一、維時仲冬、風日凄然、方_レ排_レ戸入_一、忽聞幽香霏拂襲_二人裙裾_一、詳_レ此則有_二冬日蘭數盆_一、紅萼翠葉、嬾妍相映、熊岳曰、我愛_二此花_一、培植殆三十年、死者十八九、近歲調停、稍得_二其法_一、花葉繁茂如_レ此、請賦_レ詩賀焉。

竹田は仲冬のある日熊嶽の居宅を訪れた。この日は風も強く寒い日であったが、戸を開けて入るとひそやかに良い香

りが体を包んだ。それは数鉢に植えられた蘭の香りであった。赤い花と緑の葉はともに映えてとても美しかった。熊嶽が話すのに、蘭を愛し栽培を始めてほぼ三〇年になるが、多くを枯らしてきた。近頃やつと育て方がわかってきたので、このように花も葉も多くを出すようになった。詩を作つて祝つてくださいと頼んだ、というのである。

『竹田莊師友画録』は天保四（一八三三）年に成つたが、竹田の大坂来訪は数度有り、熊嶽を訪れたのが何時のことかは明らかではない。ただし来訪が仲冬であつたことを考慮すると、文政六（一八二三）年あるいは文政一二（一八二九）年のどちらかかもしれない。いずれにしろその時蘭の栽培を始めてすでに三〇年たつていたとすれば、文化一〇年頃には蘭の栽培をしていたのであつて、『狂歌一人十首』中の蘭図制作が熊嶽に任されたのは相応しいことであつたといえよう。

熊嶽と蘭の関連で見逃すことができないのは、先に挙げた文化六（一八〇九）の山水図に「寫羣芳園南窓下」とあることと、文化一〇（一八二三）年の山水図に「於餘香室」とあることである。羣芳園、餘香室ともに熊嶽の画室の名であろうが、共に香りを含んだ名であり蘭の栽培と無関係

であるとは思えない。熊嶽が自らこのような名を付けるのは、蘭を尊んだ中国文人を慕っていることを明らかにしたかつたからかもしれない。

なおこの文化一〇（一八一三）年は兼葭堂の一三回忌にあたり、大坂大応寺で展覧が行われ熊嶽も春林書屋図を出品していることを書き加えておく。

文化年間末から文政年間初頭に描かれた作品としては、文政元（一八一八）年の跋文がある俳諧書『盃合』中の稲狩り図がある。大坂の絵師は、絵入狂歌集や絵入俳諧集の絵を数人で描くことが多く、これもその一例である。欄外に「熊嶽 浪華漢画家岡氏」とある。

文政年間には、人名録がかなり刊行されたようで、文政五（一八二二）年の『なにわ諸芸名人家玉づくし』、文政六（一八二三）年の『書画儒姓名記』『続浪華郷友録』と『金欄集』、文政七（一八二四）年の『新刻浪華人物誌』に熊嶽について記されている。記述内容は大きくは異ならないので、『金欄集』のみをあげておく。

熊嶽 画 名嬰 字少年 号餘香堂 俗称岡勝之助
住尾張坂

文化年間の人名録『文化改正浪華人物録』には住まいが上

町となっていたので家移りがあつたこと、これには文暉の名が見られないことに注意しておきたい。また個人蔵の文政六（一八二三）年の山水図には「於餘香齋」と文政七（一八二四）年の山水図には「於壽星樓」とあるので、画室名を改めることがあつたのかもしれない。ただし号としては餘香堂を使い続けていたと考えておきたい。

熊嶽の今知られている一番の大作は、中西家の襖に描かれた山水図である。中西家は淀藩領内の吉志部郷東村の庄屋や大庄屋を務めた名家で、現在も文政九（一八二六）年に再建された母屋が残る。この母屋の襖として使われていたのではないかとされるのが、この山水図である。熊嶽による「己丑嘉平月圖於壽星樓 熊嶽岡嬰」という款記があり、文政一二（一八二九）年に描かれたことがわかる。襖四面に描かれており、裏面にはやはり大坂の絵師である長山孔寅によって群鶴図が描かれているという^⑩。中西家の襖絵としては孔寅の描いたものが最も多く残るので、文政年間の襖絵制作の中心となった絵師は孔寅であつたのである。孔寅は呉春に学んだ四条派の絵師で、孔寅に全てを任せても良かったと思われるが、南画家熊嶽との競争となつたのは、中西家当主の意向が働いた可能性を考えておき

たい。というのもこの頃から煎茶が広まり、中西家の当主もこれを楽しんでいた可能性があり^⑪、煎茶空間の創出のために南画が求められたとも考えられるからである。

天保年間には、熊嶽は六〇歳代後半、すでにかなりの大家として認識されていたのであろう、天保三（一八三二）年に刊行の白井華陽の『画乗要略』には「岡熊嶽 大坂人、初師福原五岳後稍更其格、有名声」と記されている。華陽は京都で活躍した岸派の絵師で、華陽に「有名声」と書かせたのであるから、かなりの評価を得ていたことは間違いない。

『画乗要略』から一年後に刊行された書に『竹田莊師友画録』がある。この内容については熊嶽の愛蘭に関する部分を紹介した。それ以外の部分は「岡熊嶽 大坂府人、同杏堂春岳一師「福元素」、有声」で、有声は『画乗要略』にある有名声と解することができるので、竹田による評価も低くはなかつたのであろう。

この『竹田莊師友画録』が刊行された天保四（一八三三）年の一二月、熊嶽は他界した。七二歳であった。同門の春嶽や杏堂、閨苑などより長生きで、五岳門下として最後の華を咲かせた感がある。

熊嶽の作品

熊嶽の公にされている作品の内でも最も早い時期の作品は、すでにふれたように『奉時清玩帖』に収められた山水図と松図の二点の作品である。山水図は比較的荒い筆致で描かれ、後年の山水図に見られる特色は見いだされない。一方松図（立木に靈芝）には、枝跡の窪みが多く描かれるなど後の作品にも現れる特色は見いだせる。二点は小品であり、明確なことはないが、まだまだ先人達の作品を学んでいる段階であるように感じられる。重要なことは、山水図の落款が熊岳林資で林資印信の印が押されていること、また松図の落款が熊岳で致遠の印が押されていることである。林の姓や資の字などは、『浪華郷友録』に記されているが、他の作品には今のところ見いだすことはできない。とすれば、この二点の作品は他の作品からかなり先立つ作品と考えるべきであろう。

『奉時清玩帖』は大坂の表具師であり絵師である松本奉時が収集した百点以上の書画を張り込んだ画帖であり、応挙や文晁、蘆雪、若冲、岸駒などの描いた作品が含まれている。既に記したようにこれは天明七（一七八七）年頃か

ら寛政八（一七九六）年頃までの作品からなるとされるが、まだまだ評価のそれほど高くないと思われる熊嶽の作品が二点含まれるのは、寛政一一（一七九九）年以前に描かれたとされる関西大学蔵の大坂文人合作扇面に共に筆をとっているように、熊嶽と奉時が比較的近い関係にあったからなのであろう。

この二点の作品に次ぐのが、大阪歴史博物館所蔵の俵林園苑唐人物図（図1）である。園苑は熊嶽と同門であり、かなりの年上であると考えられ、熊嶽にとっては目標とすべき先輩であったのであろう。しかもこの作品が描かれた寛政九（一七九七）年にはすでに園苑は他界しており、「丁巳之春熊岳岡文暉擬園苑林又新画」との款記から、また俵川淇園の賛があることから、園苑への追憶と敬意が示されているといえるであろう。園苑の桃李園図と比較しても岩皴や樹木の描法が近く、熊嶽は園苑の描法をよく捉えている。

ほぼ同じ頃に描かれたと考えられる作品に、個人蔵の『化政間諸名家画冊』中の花鳥図があり、谷文晁や木村兼葭堂、森祖仙、鼎春嶽などの作品と共に収められている。薔薇と岩にとまるシジュウカラらしき小鳥を描いているが、輪郭

線をほとんど使わず、淡く彩色している。これに近い花鳥図は閨苑が描いており^⑫、二人の影響関係をここでも考えさせる。

閨苑との関係を示す作品としては、他に道明寺天満宮蔵の伏見桃畑図がある。図形化された樹葉、平面を重ねたような遠山、遠山にみられる点描など不思議な感じを与える作品である。「摹林日新伏水桃山圖 熊嶽」との款記があり、又新を日新と間違うなど問題はあるが閨苑の作品の模写であることを明示している。実際個人蔵の閨苑の作品が残っており、比較すると熊嶽がよく模写していることがわかる。熊嶽はもう一点同じ作品の模写を残しており、現在関西大学に収蔵されている。これには「熊岳岡文暉寫」との落款のみがあり、閨苑作品の模写であるとは書かれていない。しかし後に述べるように、この作品の方が道明寺天満宮蔵の作品より先に描かれており、先述の花鳥図に比較的近い頃に描かれた可能性もある。

個人蔵の『書画集帖』は寛政一〇（一七九八）年から一一（一七九九）年頃に集められたと考えられ、この中の『夜字帖』の内に熊嶽の林和靖図が含まれている。荷を背負った童子を従えた高士が白い鶯鳥を眺める姿を描いてお

り、鶯鳥を好んだ王羲之を描いた可能性が高い。これまでに描かれた王羲之の風貌とも近いことが、この可能性を強める。

平野美術館蔵の『楽翁画帖』は寛政一二（一八〇〇）年から享和元（一八〇一）年の間に描かれたと考えられており^⑬、熊嶽の寒梅図が含まれている。また東京国立博物館蔵の『絵手鑑』は文化二（一八〇五）年頃に描かれたと考えられており、熊嶽の山水図が含まれている。前者はやや柔らかく自由な筆法で描かれており、後者は丁寧にやや硬い筆法で描かれていて、かなり異なる印象をうける。しかし構成されている部分を比較してみると、共通していることがわかる。例えば山の形にしても左右逆にしてはいるがほぼ同じであるし、点描を多用する点でも共通する。

やはりこの頃に描かれたのが『唐土名勝図会』の図である。すでに記したように図は岡田玉山と岡熊嶽、それに大原東野の三人が担当し、それぞれかなりの数の図を描いている。風景が多いが、人物や器物の図もあり、しかもかなり細密な描写がなされている。三人の様式にそれほど大きな違いは無いが、熊嶽の図が最も細密であるように感じられる。例えば巻五の孔水洞の図などは岩と美しい樹木とい

流水といい、煩雑なまでに描かれている。また樹木の枝跡の窪みが非常に多く描かれていることが目立つ。岩もゴツゴツとして凹凸が多く、渦を巻き曲線を描く雲霞も特徴がある。そういった特徴から思い出されるのが、倣林園苑唐人物図である。この作品には樹木の幹の窪みも多く、ゴツゴツとして凹凸の多い岩も見られる。この作品の雲霞も奇妙な形をしており極めて目立つ(図2)。実はこれに近いものが『唐土名勝図会』巻一の西花園図や巻五の馬耳山図(図3)に見いだされる。とすればやはり熊嶽への閨苑の影響が大きかったことを示しているといえるのであろう。

文化二(一八〇五)年までに描かれたことがわかる作品に大分県立美術館蔵の九仙部山水風景図がある。大坂の馬田青洋の依頼によって描かれたものであるが、賛の筆跡は個性的で読みにくく、意味を筆者が理解するのは難しい。ただし紅葉時の九仙部山中の風景を描いていることはわかる。確かに紅葉した立木の散在する山荘を童子を伴った文人が訪れるところを描いている。白色に彩色された菊らしき小花が散らされているのも魅力的である。樹葉を小さな塊としそれを重なるように配する描法が目立つ。これはすでにふれた『絵手鑑』中の山水図にも見られ、遠山の形も

近い。ほぼ同じ頃の作品であり、共通するところがあるのが当然である。興味深いのが款記で、「奉 青洋先生位置 栖霞文暉」とあり、字もしくは号と考えられる栖霞は今のところ他の作品には見られないし、人名録にも記されたことがないようである。

他の文化年間の興味深い作品は、個人蔵の擬池大雅山水図(図4)である。款記には「擬大雅老人毫勢 文化己巳冬十月寫於羣芳園南窓下為三缸詞伯 熊嶽文暉」とあり、制作年と製作場所、それに三缸詞伯の為に制作されたことがわかる。特に「擬大雅老人毫勢」と記している点が重要で、師の福原五岳の師である池大雅の毫勢すなわち筆の有様、筆法をまねると記しているのである。確かに、人物の顔貌や岩、樹木など大雅の描法に近い。それはこの作品と東京国立博物館蔵の大雅の六遠図を比較すれば、また人物についてはこの作品と十便画帖を比較すればわかるであろう。「擬大雅老人毫勢」という款記も大雅の書法を用いて書いており、大雅への敬意を持って描かれたことを強く感じさせる。

大雅の様式に習って描いたと感じさせる作品がもう一点存在する。それは癸未すなわち文政六(一八二三)年の年

記のある個人蔵の西湖図で、岩などの輪郭を墨線で描きその中を細かい筆を重ねることで埋め、自由で一見稚拙な感を与える描線で樓閣を描くなど、大雅の作品とのいくつもの共通点を見いだすことができる。そのことは東京国立博物館蔵の大雅筆西湖春景・錢塘觀潮図とを比較すれば理解しうるであろう。西湖は浙江省にある名勝の地で古くから絵に描かれてきた。一般的な西湖図では下方に杭州の城壁が、その上に広く湖面をさらにその上に蘇堤が、右方に白堤が描かれる。しかし大雅は湖面を狭く、一方湖を取り囲む山や丘陵を高く大きく描くなど、大雅ならではの風景を展開しているのである。熊嶽も湖面を狭く湖を取り囲む丘陵などを煩雑なまでに多く高く描いているのであって、西湖春景図かこれに近い大雅作品を参考にして、熊嶽はこの西湖図を描いた可能性を考えざるを得ない。しかし熊嶽の西湖図ではもはやどれが蘇堤でどれが白堤かわからず、西湖図であって西湖図ではない作品になってしまっているのであって、熊嶽の独自性が發揮されているということもできるのかもしれない。

再び文化年間の作品について考えるが、個人蔵の文化一〇（一八一三）年の年記のある山水図は、九仙部山水風

景図と共通するところがある。樹形や樹葉の描法は近く、共に山居の果たしている構図上の重要性も比較的大きい。これらの作品以外に文化年間の年記を持つ作品は、筆者は知り得ていない。年記のない作品の中には文化年間制作である可能性を有する作品は当然あるが、この点については後に触れる。

文政年間の年記のある作品としては、西湖図の次年文政七（一八二四）年に描かれた個人蔵の蘭亭図が挙げられる。これは中国東晋の官僚であり書家である王羲之が蘭亭で催した曲水の宴を描いたもので、熊嶽はかなり横長の画面に描いており、林の間に小さく描かれた人物を散在させる。樹葉を墨点の集積で表す描法はすでに九仙部山水風景図などに見られるが、山を石層や石塊の集積のように描く点を目を引く。

横長の画面に蘭亭図を描く場合は、多くは流れを右から左へ流れるように描き人物を両岸に配するのであるが、この図では流れは時には木々によって隠され大きな役割を果たしていない。個人蔵のもう一点の縦長の蘭亭図においてもやはり流れはあまり見えないのであって、熊嶽の関心はどちらかと言えば樹叢や山々によって作り上げられる風景

にあつたように感じられる⑭。ということは熊嶽は蘭亭での宴を主に描こうとしたのではなく、自然の中でたまたま宴がおこなわれていた様子を描いたといひ換えたいが、問題は残るのであろう、ここはやはり蘭亭なのだから。

同じ年に描かれた作品に吹田歴史博物館蔵の衝立装の山水図がある。やはり石塊の集積のような山が描かれるが、蘭亭曲水図の山よりも丸みを増し、南画の特徴としてよくいわれるつくねいも状に近くなる。

大阪歴史博物館蔵の梅林図は、箱蓋裏に文政一〇(一八二七)年の年記が有り、これに近い時期に描かれたと考えられる。熊嶽自身の作と思われる賛があり、梅花に赤と白で細かく彩色するなど、丁寧に描かれており熊嶽は力を込めて描いたものである。構図も纏まりが良く正統的な優れた南画山水といえようが、熊嶽の個性があまり出していないという物足りなさを感じる。同じようなことは吹田市立博物館蔵の襖に描かれた山水図についてもいえる。このような作品の後に、個人蔵の山水図のような中景の山を上へ上へと重ねる少しばかり煩雑な山水図が描かれることになるのであろう。

南画山水の構成要素としては、一般的には河川もしくは

湖水に東屋などの建物、中景の高山に霞んだ遠山などがある。中景の高山は頂を画面の中央や左右寄りに描かれるのが普通で、浦上玉堂などの山水図をみれば明らかであろう。熊嶽の山水図にもこれに当てはまる山水図があり、大阪歴史博物館蔵の梅林図や吹田市歴史博物館蔵の山水図はその例である。しかし熊嶽の山水図では中景の高山の頂を画面の外に求める構図が多い。それはすでに東京国立博物館蔵の『絵手鑑』の山水図や『楽翁画帖』の中の寒梅図に見られ、晩年の作と思われる山水図(図5)にまで見られるのである。高山の頂を画面の中に置く場合は意識や視線の集中をもたらすのに対し、画面の外に求める場合は意識の拡大や視線より大きな動きをもたらす。

樹木や草叢を墨点で表現するのは南画ではよく見られるが、熊嶽の山水画では岩や山の輪郭線の上にもこの墨点を多く置くなど、やや過剰に用いられている(図6)。これによって輪郭線の表現の強さを緩和することになり、柔らかなさを感じさせる一方で明快さに欠けることにもなった。なお熊嶽の山水画によく描かれるものとして、河川や湖中の岩があるので、部分図を示しておきたい(図7)。

熊嶽の人物画は少なくはないが、これまで熊嶽の人物画

にはほとんど触れなかった。その理由はおおよそでも制作年代のわかる作品が小品であるためであった。何点かの作品にふれたいが、まずは大阪歴史博物館蔵の桃林結義図を取り上げる。

桃林結義図とは中国三国時代の劉備、関羽、張飛の三人が桃園で義兄弟となる誓いをおこなったという『三国志演義』に書かれた逸話を描いたものである。熊嶽は桃の木に囲まれた三人を描いているが、三人の衣装もほとんど変わらないためにどれが誰かわからず、工夫が足りないところがあるにしても、明確で息の長い衣紋線には躊躇が見られず弾力があり好ましい。

この作品の落款とかなり近い落款を持つ人物像として、個人蔵の飲中八仙図(図8)と郭子儀図がある。飲中八仙図は杜甫が作った飲中八仙歌にうたわれた唐時代の八人の酒豪を描いており、郭子儀図は唐時代の軍人で子や孫に恵まれていたとされる子儀を描いている。この二図は大きさもほぼ等しく描法も近いので、双幅として描いたものかもしれない。衣紋線はやはり明確で息が長く、頬などにやや濃い彩色を施すのも桃林結義図と共通する。女性の顔貌は師の福原五岳に学ぶのであろう。そのため閨苑の描く女性

の顔貌とも共通するが、中国風が薄まり丸顔の親しみやすいものになっている。

ウエブ上に公開された喫茶図⑩は、茶碗や湯罐をかけた涼炉などを置いた台を背にして岩に肘をついた人物を描くものである。文政一二(一八二九)年の篠崎小竹の賛があるので、熊嶽の晩年の作品であることがわかる。服装から考えて中国の歴史上の人物を描いているのはわかるが、誰であるかの明示はされていない。しかし賛を考え合わせると唐時代の『茶経』を書いた陸羽である可能性が大きい。時代は下るが天保一二(一八四一)年に描かれた春木南溟の陸羽像があり、これも正面向きの像であり岩座に座ることから、何らかの関係がありそうである。共に中国で描かれた陸羽像を参考にして描いたものであろう。特に南溟の陸羽像は中国画の忠実な模写である可能性もある。賛は小竹の筆によるとみてよく、衣紋線は明確で息が長く、熊嶽の山水図によく見られる岩の輪郭線に墨点を多く重ねる特色も見られるなど、熊嶽の作であることを示している。

以上の作品の他に関西大学蔵の飲中八仙図や鍾道図、八尾市蔵の寿老人図などがある。寿老人図には畳目が残り席画であるが、衣紋線に他の人物図の衣紋線と共通する特

徴があり、熊嶽作と考えられる。誰かの顔貌を写したようにも感じられる。飲中八仙図の輪郭線はたどたくしく熊嶽の作とすることに躊躇せざるをえない。しかしこれが後に述べるように熊嶽の初期作品とすれば熊嶽作品として認めて良いのかもしれないが、個人蔵の飲中八仙図との描写力の差はあまりにも大きい。

熊嶽の落款と印

以上熊嶽の作品について述べてきたが、落款と印についても検討しておきたい。そのためにもまずおおよその制作年代のわかる作品を挙げ、その落款と印を記す。

山水図〔奉時清玩帖〕寛政八（一七九六）年まで

熊岳林資 林資印信（白文方印）

松図〔奉時清玩帖〕寛政八（一七九六）年まで

熊岳 致（方印）遠（白文方印）

花鳥図〔化政間諸名家画冊〕

寛政八・九（二九七六・七）年頃

熊岳岡文暉 文暉印（白文方印）

傲林園苑唐人物図 寛政九（一七七七）年

熊岳岡文暉 岡印文暉（白文方印）

岡氏世昌（白文方印）

蘭図（大坂文人合作扇面）寛政期（一七八九〜一八〇二）

熊岳 不明

寒梅図〔楽翁画帖〕寛政一二（一八〇〇）年

享和一（二八〇二）年

熊岳 文口（朱白文連印）

王羲之像〔夜字帖〕寛政末頃（一七九〇年代）

熊岳 文暉（朱文連印）

『唐土名勝図会』文化二（一八〇五）年頃

熊岳岡文暉 熊嶽（頭円長方印）

山水図〔絵手鑑〕文化二（一八〇五）年頃

熊岳 文暉（白文方印）

九仙部山水風景図 文化二（一八〇五）年

栖霞文暉 岡氏世昌（白文方印）

擬大雅山水図 文化六（一八〇九）年

熊嶽文暉 岡印文暉（白文方印）

岡氏世昌（白文方印）

蘭図〔狂歌一人一首〕文化一〇（一八一三）年

熊嶽 熊岳（白文連印）

山水図 文化一〇（一八一三）年

熊嶽岡暉 岡氏文暉（白文方印）

岡氏世昌（白文方印）

林間人物図（『御手鑑』） 文政五（一八二二）年頃

熊嶽岡嬰 岡嬰之印（白文方印）

岡氏少年（白文方印）

西湖図 文政六（一八二三）年

熊嶽嬰 岡嬰之印（白文方印）

岡氏少年（白文方印）

蘭亭図 文政七（一八二四）年

熊嶽岡嬰 岡嬰之印（白文方印）

岡氏少年（白文方印）

山水図衝立 文政七（一八二四）年

熊嶽岡嬰 不明（朱文半橋円連印）

岡嬰（白文方印）

喫茶図 文政一二（一八二九）年頃

熊嶽嬰 不明

山水図襖 文政一二（一八二九）年

熊嶽岡嬰 熊嶽（朱文連印）

不明（白文不明印）

以上の比較によっておおよそ次のように考えることがで

きる。熊岳から熊嶽に変えたのは文化二（一八〇五）年から文化六（一八〇九）年の間である。名の文暉から嬰に字の世昌を少年に変えたのは、文化一〇（一八一三）年から文政六（一八二三）年の間である。林の姓と名の資を名乗ったのは寛政八（一七九六）年以前である。文政年間の人物録が名を嬰とし、木村兼葭堂が天明から享和にかけての日記に熊岳と書いていることも、以上のことと矛盾しない。なお先に大阪歴史博物館蔵の諸家による飲中八仙図を文化年間の作としたのも、落款が熊嶽であるからである。また関西大学蔵の伏見桃畑図が道明寺天満宮蔵の伏見桃畑図に先行するとしたのも、やはり前者の落款が熊岳岡文暉であり後者のそれが熊嶽であるからである。

以上のように考えてきて謎が残るのは、関西大学蔵の飲中八仙図の落款が熊岳であり、印として岡晋と子嵩の朱文方印が押されていることである。名を資とするのは寛政八（一七九六）年以前と考えざるを得ないが、名や字に晋や子嵩を使った時期があったとすればさらにそれ以前であろう。熊嶽にとつては今のところ初期作と考えざるをえず、とすれば既に述べたような問題のある輪郭線も初期作である故に生まれたと考えることもできる。しかしながらその

後の作品の輪郭線との力の差はかなり大きく、今のところこの作品を熊嶽作品として認めることにはやはり躊躇せざるを得ない。

おわりに

筆者が調査し得た熊嶽作品は多くはない。その理由はまづは筆者の能力不足にあるが、これまで公になってきた作品が少ないことにもよる。しかし熊嶽の制作期間は長くなり、数の作品を描いたはずであり、現在も公にされないままに眠っているはずである。そのような作品が次々と明らかになってくれば、評価もかなり変わる可能性があるが、これまで明らかにされてきた作品を対象に筆者なりの検討を加えてみた。

岡田米山人の評価が近年高いのは、その独自の作風によるといえようが、では熊嶽の作風には大いに独自性があるかといえ、残念ながら米山人とはいわないまでも、閨苑に比するまでの独自性があるともいえない。しかし人物図など見ても技量はしっかりしており、心を遊ばす山水世界の構築という点でも評価のできる絵師といえるであろう。今後も作品が次々と公開されることを待ち、再び検討を加

えることができることを期待するばかりである。

注

① 神山登「文人画」（大阪市立美術館編『近世大坂画壇』所収）
および橋爪節也「近世大坂文人画の展開と問題―木村兼貞堂とその周辺を中心に」（大阪市立博物館『近世大坂画壇の調査研究』所収）

② 後にふれるように落款には熊岳と熊嶽があり時代により変化するが本論では熊嶽に統一して述べる。

③ 平成二七（二〇一五）年九月から一二月まで開催された。

④ 岡本撫山著、吉川弘文館発行。一九一九年刊行か。

⑤ 『江戸名作画帖全集一〇 文人諸家』（駿々堂出版刊）所収。

⑥ 大阪歴史博物館『猿描き狙仙三兄弟展図録』所収。

⑦ 井深明「四日市市某家所蔵『書画集帖』のうち『夜字帖』について」（大阪市立博物館『近世大坂画壇の調査研究Ⅱ』参照）

⑧ 大阪歴史博物館『猿描き狙仙三兄弟展図録』所収。

⑨ 岩佐伸一「大坂の唐画師による寄合描き『飲中八仙図』について」（『大阪歴史博物館研究紀要』第9号）参照。

⑩ 吹田市立博物館『大庄屋中西家名品展図録』作品解説参照。

⑪ 中西家には中国宜興の急須や京焼の涼炉などの煎茶道具が残されており、江戸時代後期には当主が煎茶を楽しんでたことはほぼ間違いない。

⑫ 個人蔵の『花鳥・飲中八仙図画帖』（明和七年跋）（千葉市美術館・大阪歴史博物館『唐画人展図録』所収）。

⑬ 『光琳を慕う中村芳中』（芸艸堂刊） 作品解説参照。

⑭ 林閨苑の蘭亭図にも共通するところがあり、この作品の場合多くの山の重なりに関心があるように見える。

⑮ <https://open.mixi.jp/user/10076855/diary/942560656>

追記 大阪歴史博物館の岩佐伸一氏には作品の調査にご協力いただいたほかご教示もいただいた。瀧北敬久氏には作品調査にご協力をいただいた。また大分県立美術館の宗像晋作氏には資料を提供していただいた。お礼を申し上げます。

なお、校正時に国立国文学研究資料館蔵の『三疋亭集書画帖』の存在を知った。この中に岡資の落款のある熊嶽の山水図が収められており、この帖の皆川淇園の序が文化二年であることから、山水図も文化二年以前に描かれたことがわかる。三疋亭は擬池大雅山水図の制作依頼者もしくは贈呈の対象者である三疋詞伯と同一人物と思われる。以上ことから落款使用の時期などについて、再検討が必要になるかもしれない。



图2 图1部分

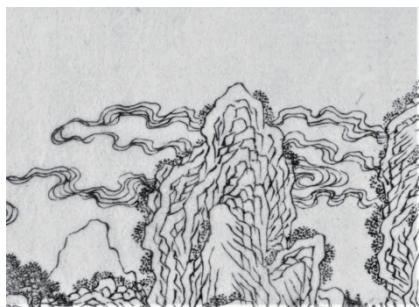


图3 唐土名勝図会 卷五



图1 倣林園苑唐人物図
(大阪歴史博物館)



图5 山水图



图4 拟池大雅山水图



图8 飲中八仙圖



图6 山水圖部分



图7 山水圖部分